現代インド研究　第 2 号 1–2 頁　2012 年
Contemporary India, Vol. 2, 2012, pp. 1–2

『現代インド研究』第 2 号特集の趣旨

暴力とその克服

中溝　和弥

「テロとの戦い」が始まって 10 年になる。米軍撤退を迎えたイラク、先行きの見えないアフガニスタン戦争、世界各地で引き起こされる民族紛争など、人類は暴力の連鎖に依然として囚われている。冷戦終結後の楽観は湾岸戦争で消え去り、ルワンダ内戦、ユーゴ内戦、コンゴ紛争が後を襲った。絶えることのない殺し合いを、私たちは克服していけるだろうか。

暴力とその克服を考える上で、南アジアは貴重な場を提供する。インド・パキスタン分離独立時に起こった空前の大宗教暴動は、トラウマとして人々の心に深く刻み込まれ、両国間の三度にわたる戦争、そしてインド国内において繰り返される宗教暴動の背景要因となった。印パ両国間関係から目を転じると、ネパールでは、暴力革命を信奉する左翼過激派マオイストによる人民戦争が 1996 年から 10 年にわたって展開され、スリランカではシンハラ人とタミル人の間で激化した民族紛争が、シンハラ人を主体とする政府による武力弾圧という形で 2009 年に「解決」された。冒頭の「テロとの戦い」との関連では、主戦場であるアフガニスタンはもちろんのこと、前線となったパキスタンでも、急進派と政府との対立が国内政治を揺るがしている。

それでは、南アジアは暴力に支配された荒廃の地と言えるだろうか。夥しい暴力が存在することは確かであるが、同時に、暴力を克服する試みも一貫して行われてきたことは見逃せない。現在でもなおその意義が評価され、実践が試みられるガンディーの非暴力主義は、英領インドが起源である。紛争を非暴力的に解決することを重要な一つの特徴とする民主主義は、独立インドが誇った政治制度であった。もっとも、インド以外の南アジア諸国では民主主義はなかなか定着しなかったが、その点は他地域の途上国も同様である。むしろ、途上国では稀な例として民主主義国家インドが存在することが、暴力の克服を考える上で南アジアの価値を高めている。

本特集は、暴力とその克服について、南アジアを題材として取り上げ考察した五本の論考から構成されている。最初の外川昌彦論文「一本の樹の無数の枝葉—1920 年代の宗派暴動とマハトマ・ガンディーの宗教観の変遷」は、ガンディーの非暴力主義を支えた宗教観が、現実の宗教暴動と対峙することによって鍛えられていく過程を描いている。ガンディーの非暴力主義運動は、宗教的シンボルを極力排除したことで知られるが、ガンディー本人は優れて宗教的であった。その宗教観の変遷に的を絞った視点が斬新である。

そのような非暴力主義に基づいて生まれた独立インドは、しかし、非暴力の国ではなかった。木村真希子論文「社会運動と集合的暴力―アッサムの反外国人運動と『ネリーの虐殺』を事例に」は、1983年にアッサム州ネリー村で起こった暴動を素材に、暴動が発生するメカニズムを明らかにしている。ネリー暴動の事例は、政党や大規模組織が暴動の参加者を動員して暴動を引き起こす民衆操作型でも、民衆が暴動を主導する民衆自律型でもなく、運動指導者と暴動参加者の利害が一致して引き起こされる相互作用型であると木村は分析する。農村における暴動を取り上げた貴重な研究と言えよう。

非暴力の国ではなかったのは、インドだけではない。隣のパキスタンも同様である。山根聡論文「対テロ戦争によるパキスタンにおける社会変容」は、2001年9月11日以降展開されている「テロとの戦い」に焦点を当て、1980年のソ連によるアフガニスタン侵攻以来のムスリム武装勢力の流入が、パキスタン部族地域、そしてパキスタン社会に与えた影響を分析した興味深い論考である。武装勢力の流入は伝統的社会に変革を迫り、同時に国際社会の無責任な対応がパキスタンに暴力の芽を育てることになった。暴力の連鎖をいかに断ち切るか、山根の提起する問題は重い。

組織的な暴力ではなく、個々人の間で生起する暴力に着目した論考が、田中雅一論文「名誉殺人―現代インドにおける女性への暴力」である。田中は、サティー、名誉殺人といった主に女性が犠牲となる暴力を取り上げ、「名誉の共同体」と対抗する「哀しみの共同体」という分析概念を立てる必要性を強調する。暴力が生み出す痛みを共有する「哀しみの共同体」を見いだすことによって、「名誉の共同体」による暴力を克服する可能性も現れると田中は指摘する。女性問題への着眼と合わせて、鋭い分析である。

田中が提起した暴力の痛みという問題を、プーラン・デーヴィーという「盗賊の女王」の人生に見出し、インド民主主義の展開のなかに位置づけたのが、最後の竹中千春論文「ジェンダー、暴力、暴力の克服―プーラン・デーヴィーとその時代」である。プーランは、女性であることをはじめとして、インド社会において幾重もの社会的「周縁性」を体現する存在であったが故に、「レイプ」に象徴される凄まじい暴力の「犠牲者」となった。彼女は生き延びるために盗賊という「加害者」になったが、後に政治家として合法的で非暴力的な「改革者」へと転身した。いわばインドの民主主義が「暴力の克服」を可能にしたと言えるが、暗殺で最後を迎える。竹中は、プーランの人生とインド民主主義の展開を躍動的に結びつけることによって、インド民主主義の可能性と限界を深く洞察した。

これら五本の論考は、いずれも「暴力とその克服」という簡単には答の見出せない課題に迫った力作である。読者が現代世界における暴力の理解を深め、暴力の克服を考える契機を見いだして下されば、編者としてこれ以上の喜びはない。

（『現代インド研究』第２号特集担当編集委員　太田信宏、友澤和夫、中溝和弥）